

つも騒然としており、また従業員の方も忙しく立ち働いていらっしゃるため思うように話を聞けなかった。そこで、問屋業者で組織されている既製服産業組合に行き、現状を教えて頂いた。また、この問屋街業者へのアンケートは地元の商業高校や銀行、組合などによって予想以上に頻繁になされていたためにこれを利用することにした。

衣服産業は近年注目され始めた部門であるため論文や出版物が少なく、またこの問屋街についての論文も、衣服産業が岐阜市の基幹産業であるにもかかわらず少なかったため苦慮したが、岐阜大学の先生方に御相談したところ親切に指導して下さい大いに助かりました。

統計は、商業統計表、工業統計表、事業所統計表などによったのだが、東京や大阪などの明治時代から衣服産業が盛んな産地にははるかに及ばないながらも、岐阜市の衣服・その他の繊維製品の事業所数、従業者数、製造品出荷額は全国の上位に位置しており、統計的にも岐阜市の既製服産業の隆盛の程が立証できた。

この問屋街が始まったのは終戦直後と歴史的には非常に浅いため、技術やデザイン力の立ち遅れが目立ち、比較的技術の容易な婦人服やスポーツウェア、学生服などに主体を置いており、紳士服の取り扱いは少ない。発展要因としては、国鉄岐阜駅前に業者が集積しており、また古くからの毛織物産地である一宮、尾西に近接して仕入れに有利だったこと、地方都市であるため大都市に比べると安い労働力の入手が容易だったこと、小規模故に大衆化、ファッション化などへの体制改善が機敏に行なえたことなどが考えられる。

しかし、発展途上国からの安い衣料の輸入が盛んな近年では、従来の安価製品であるだけの特質に頼りきらず、岐阜産地の新たなセールスポイントを開拓していくことが今後の大きな課題だと言える。

大垣市の都市機能

福田 弘子

(1) 目的

岐阜県大垣市は、濃尾平野西部に位置し、西濃と呼ばれる地域にあり、県下では岐阜市に次いで人口の多い都市である。この都市が現在どのような機能をもって存在するのかを明らかにすることがこの論文の目的である。

(2) 研究の枠組

第一章では、大垣市の自然、特に水について触れ、また城下町大垣の歴史を述べた。

第二章では、大垣市の都市圏と題し、行政、通勤通学者数、商圏の3つの点から分析した。

第三章では、近代工業都市としての大垣市を、繊維工業の動向を中心に明らかにした。

(3) 結果

大垣市は江戸時代戸田10万石の城下町として発展していた。当時現在の県庁所在地岐阜市にある岐阜城には城主がなかったから、行政の中心において大垣は県下第一であったと言える。明治維新によ

って大垣は城下町としての機能を失い、行政機能も失った。

現在大垣市は西濃地域において人口、商業、工業の点で第一の都市である。研究の結果としては次のことが言える。

- (1) 行政において西濃地域は大垣地域、揖斐地域の2つにわけられ、大垣市は揖斐郡を除く大垣地域にある。
- (2) 通勤通学者数からみると大垣市の吸引力の及ぶ範囲は市の西部にあると言え、名古屋市、岐阜市へ地理的にまた交通上近い南部と北部には及ばなくなる。
- (3) 商圏からみると、西濃地域の中部が大垣市の支配下にあると言える。その商店数と大型店数において他の郡部より大きく優位にある。が、名古屋市、岐阜市の商業力が西濃地域に入りこみ、大垣市の商圏の拡大を押さえている。

故に大垣市は西濃地域において市周辺の町村、全体からみれば中部で都市圏を形成している。西濃地域の北部と南部は他の市の都市圏に入っているが、それは名古屋市、岐阜市の商業規模の大きさと、北部と南部を通る交通が理由としてあげられる。

次に工業であるが、大垣市は中京工業地帯の一端を担う工業都市であり、また、西濃地域全体がそうであると言える。明治末から繊維工業都市として歩み続けた大垣市も、戦後、製造品出荷額からみると、繊維の比重が軽くなり続けている。例えば繊維の割合は昭和26年71.4%、昭和40年50.7%、昭和50年30.2%となっている。これは西濃地域全体の傾向でもあり、大垣市を中心とした繊維工業はその位置が変化しつつある。他の工業、特に化学、金属機械工業の出荷額が増加し、多種多様な工業都市になっているといえる。

島根県仁多郡鳥上地区における元たたら地帯の地理学的考察

村 上 郷 子

古代から昭和初期まで、中国山地風化花崗岩地帯ではたたら製鉄が行われていたが、これが現在の、斐伊川を媒介として中国山地から下流平野までの出雲地方一帯に与えた影響は自然・人文両面にわたって多大なものである。私は、斐伊川の最上流であり最後までたたら製鉄を行っていた仁多郡横田町内の鳥上地区をフィールドに選び、斐伊川下流の簸川平野、出雲地方一帯、そして島根県全体も含めながら、第I章自然では地形変化、第II章人文面では、集落、農牧林業に与えたたたらの影響、そして第III章では、たたらの歴史と現在のたたら操業、を中心として、現地での聞きとりと文献調査、そして12月上旬の全国たたら研究会の講演と巡検などからまとめてみた。

鉄穴流しによる地形の変化は、上流では鉄穴場での山腹の切り崩しであるが、大変花崗岩風化の進んだ山地であるので、数10mは山を削っている。また下流地域では谷が流砂によって埋積され、新田造成につながった。横田の水田は、ほとんど鉄穴流しによってできたものである。埋積地が畑となり水田となるには60年ぐらいかかった。また、斐伊川を流れた砂が河口に簸川平野を作ったことも大きい。江戸時代の河口部での洪水と流路変遷、簸川平野の拡大はすさまじく、30年で20haを作った記録